

群 教 七	101 - 03
	平 16.224集

肢体不自由養護学校の児童生徒の主体的な活動を引き出す支援のコーディネート

- ITを活用した教材・教具を用いる支援を中心に -

特別研修員 森 尚久 (群馬県立あさひ養護学校)

《研究の概要》

肢体に障害のある児童生徒の主体的な活動を実現する支援として、IT（情報技術）を使用した教材（以後IT教材）の活用が注目されている。しかし、現状では、十分活用されているとはいえない。教師や保護者がこれらのIT教材を活用する課題を検討し、IT教材を用いて児童生徒の主体的な活動を引き出す支援を行いやすくすることを目指したコーディネートを実施することにより、学校や家庭でIT教材を活用する方策を明らかにした。

【キーワード：特別支援教育 教材・教具 主体的活動 IT教材】

主題設定の理由

本校は肢体不自由養護学校である。現在在籍している児童生徒の8割以上が肢体不自由の他に、知的障害を併せもっている。これらの児童生徒は「好きなテレビ番組を選んで見たい」、「自分の気持ちを周囲の人に伝えたい」、「自分で活動の始めと終わりを判断して行動したい」などの様々な願いや思いをもっている。しかし、中には「リモコンの小さなボタンを操作するのが難しい」、「発語がなく意思をうまく伝えられない」、「時計が読めないために活動の区切りを自分で判断できない」といった、身体の動きやコミュニケーション、状況把握などの面での困難があり、願いや思いの実現が難しい児童生徒がいる。

これらの困難を軽減し、児童生徒が、できるだけ多くの願いや思いを実現できるようにするために、有効な方法の一つとして、教材・教具を用いた支援がある。特に、IT教材を用いた支援は、本校の児童生徒の障害に応じて願いや思いを叶えるのに適している。

例えば、「テレビのリモコンに押しやすい大きなスイッチを取り付けることで、手指の細かい動きの難しい児童生徒が自分でスイッチを押して、自分の好きな番組を選ぶことができる」、「発語の難しい児童生徒が、音声を録音再生できるIT教材であるVoice Output Communication Aide (VOCA)を自分で操作し、録音された『せんせい』という語を再生して、離れたところにいる教師を呼ぶことができる」、「時計を読むのが難しい児童生徒が、一定時間ごとにライトが消灯するIT教材であるタイムエイドのライトの変化を見ることによって、自分で時間の経過を判断して行動することができる」などの支援が可能である。

教師や保護者がこれらの支援を行うことで、児童生徒は主体的に活動し、自分の願いや思いを叶えられるようになる。しかし、教材は教師が個人で所有している場合が多く、教材活用の情報が共有化されていない現状もある。

そこで、より多くの教師や保護者に、IT教材を用いた支援の成果を伝え、IT教材を用いた支援を行いやすくなるよう働きかけて、児童生徒の主体的な活動を引き出すことが、児童生徒の願いや思いを叶えることにつながると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

児童生徒が主体的に活動できるように、教師や保護者にIT教材を用いた支援を行いやすくするようなコーディネートの方法を実践を通して明らかにする。

研究の構想

自立活動係を、教材・教具を用いた支援を手助けするコーディネート役とし、その役割を図1のように整備して、教師や保護者がIT教材を用いた支援を行いやすくなるようにする。(以後、「教材」は、主にIT教材を示す)

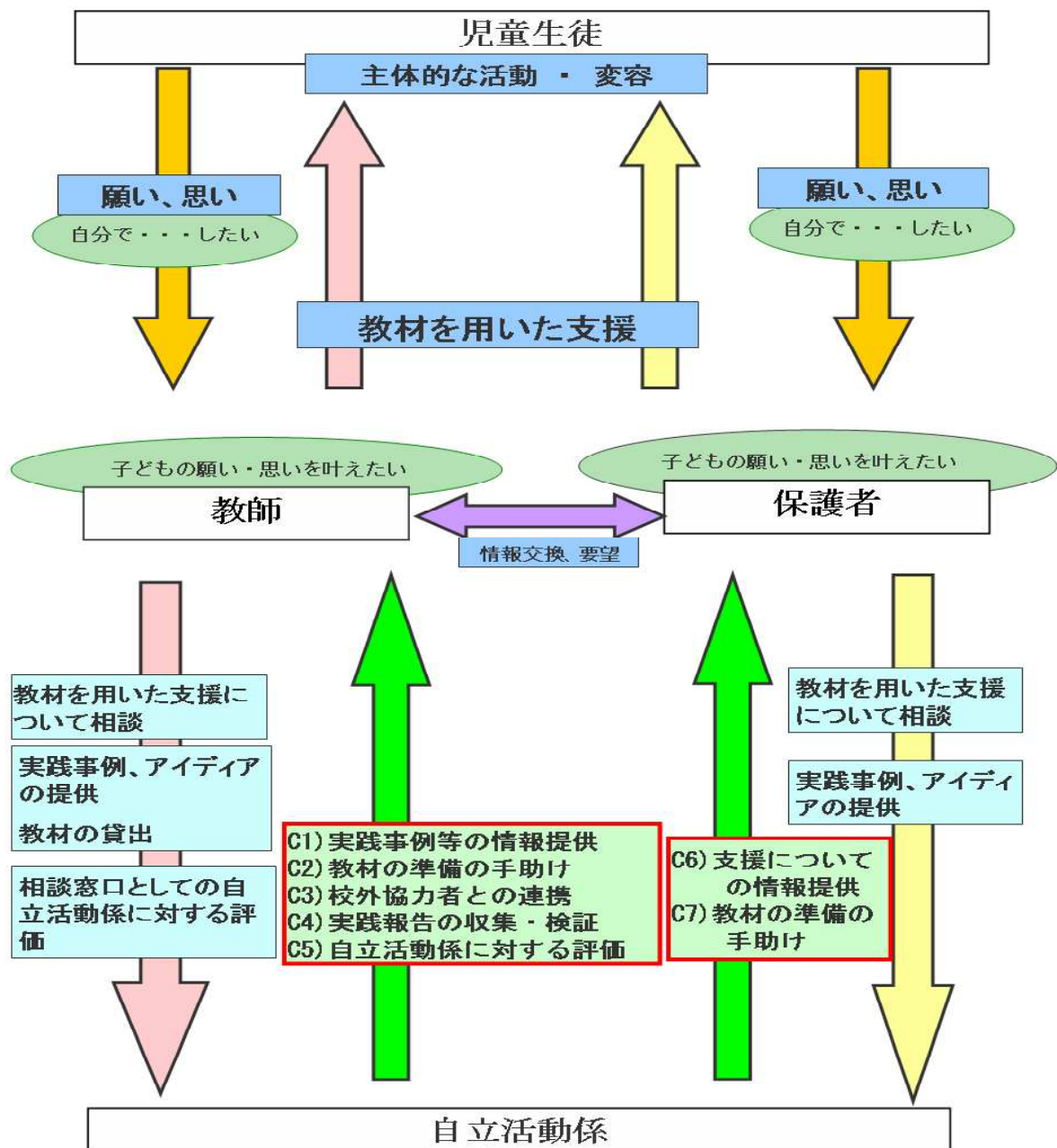


図1 研究の構想図

研究の内容・方法

教師や保護者が、IT教材を用いた支援をより行いやすくするために、次のような働きかけを行う。

1 教師に対しての働きかけ

- C1) 実践事例等の情報提供
- C2) 教材の準備の手助け
- C3) 校外協力者との連携
- C4) 実践報告の収集・検証
- C5) 自立活動係に対する評価

C1) 実践事例等の情報提供

教材を用いた支援についての情報提供

今年度までの実践事例（児童生徒の実態、用いられている教材などを含む）を収集し、それを参考に対象児童生徒の実態に合った教材を用いた支援についての相談に応じる。

教材についての情報提供

相談者が必要とする教材と、その教材の機能・基本的な使用方法についての情報を提供する。

事例報告会の開催

事例報告会を開催し、実践の様子を伝えることで、支援の方法、工夫などを考えるきっかけを提供する。

C2) 教材の準備の手助け

教材の貸し借りの支援

支援に必要な教材を他の教師が持っている場合、その教師の紹介や貸し借りの橋渡しを行う。

教材の製作支援

支援に必要な教材に既成のものがなく、新たに製作する必要がある場合、その製作支援や助言、製作会の開催などを行う。

C3) 校外協力者との連携

支援について情報の共有

自立活動係や校内の教師だけでは、相談者に必要な情報が提供できない場合、総合教育センターの事業であるアイキャン教材プロジェクトのネットワークを活用し、校外の協力者からも情報を求める。

教材製作の連携

教材の製作を行う際には、知識面、技術面で経験を積んだ教師の手助けが必要な場合が多く、そのような手助けを行える教師の数は校内だけでは限られている。このような場合、他校で開催される製作会に本校からも参加できるよう連絡調整を行い、知識面、技術面での協力を求めることで、教材の製作機会を増やす。同様に、本校で教材製作会を開催する際にも、他校と連絡をとりあって、他校の製作希望者を受け入れる。

C4) 実践報告の収集・検証

実践報告の収集

コーディネートを行った支援について、支援を行ったことで児童生徒にどのような変容が見られたか、各教師に実践報告書の提出を依頼する。

主体的な活動の検証

コーディネートした支援が、児童生徒の主体的な活動につながっているか、実践報告等から検証する。

C5) 自立活動係に対する評価

アンケートを実施

自立活動係が教材を用いた支援についての相談窓口として機能していたかどうか、アンケートを通じて評価を求め、それを基に改善を進める。

相談件数の集計

相談がどの程度寄せられたかをまとめ、今後の相談への参考にする。

2 保護者に対する働きかけ

C6) 支援についての情報提供

C7) 教材の準備の手助け

C6) 支援についての情報提供

校内での教材を用いた支援について、次のような方法で、保護者に情報を提供する。

教材の展示

教材の展示を行い、支援にどのような教材が用いられているか、保護者に知らせる。

教材を用いた支援について説明

授業参観や文化祭などを中心に随時、児童生徒への支援の様子を保護者に知らせる。

C7) 教材の準備の手助け

教材の貸し出し

校内で児童生徒が用いている教材の中で、特に日常生活に必要な教材が家庭でも使用できるよう、教材の貸し出しをする。

教材の製作支援

保護者も参加できる製作会を開催する。

実践

自立活動系の働きかけとして、次のような実践を行った。

1 教師に対しての働きかけ

C1) 実践事例等の情報提供

教材を用いた支援について、教師からの相談に応じ、実践事例の紹介を8件行った。その中の3件の相談について表1に示す。

表1 相談とその対応

相談内容	対応	児童生徒の変容(主体的な活動の様子)
特定のキャラクターには視線を送るが、自分から手を伸ばすことの少ない生徒に対し、興味のあるものに自分から働きかける指導を行いたい。	キャラクターのおもちゃを自分で動かせるようにすることで、スイッチに手を伸ばすようになった実践事例を紹介した。その後、担任がキャラクターの電動おもちゃを購入したので、そこに外部スイッチがとりつけられるよう自立活動係が改造し、スイッチの貸し出しも行った。	まだスイッチとおもちゃとの関係が確実に結びついていない様子で、偶然スイッチに手が触れたときには、おもちゃの動きをじっと見ていた。その後、なかなか手を前に伸ばすことの少ない対象生徒が、自分から手を伸ばす様子が数回見られた。
目の見えない生徒に、自分からの働きかけで物が動く経験を多く積ませたい。	おもちゃの扇風機を動かして風を感じるという指導を紹介した。その後、おもちゃの扇風機に、手探りでも操作できるよう大きめのスイッチを取り付ける支援も行った。	風を感じることに自体には興味を示さなかったが、それによって鈴などが揺れるよう設定したところ、手を伸ばしてしばらく遊んでいた。興味が長く持続することはなかったが、自発的にスイッチを操作する様子は見られた。その後、担任から他の音の出るおもちゃで指導を続けているという報告を得た。
訪問教育を受けている生徒が、外の様々な音や音楽を聴ける教材を探していたが、VOCAはどのような教材なのか。	VOCAを用いた実践事例3例と、ラジカセを生徒が操作しやすいようにした事例を紹介した。その後、相談者はアイキャンVOCA(6チャンネルの音声録音再生教材)を製作し、子どもが自分でスイッチを操作することで、好きな虫の声などを聴くことができるよう支援を行った。	音の好きな生徒であることもあり、再生された音に対して笑顔を見せる。自分でのスイッチ操作はほとんど行わないが、まれにわずかな手の動きでスイッチを操作しているように見える。

事例報告会の開催

教材とそれを用いた実践事例の紹介を行った。実施は6月、7月、9月の3回である。

それぞれ15分程度、展示した教材を見せながら行ったもので、参加者はどの回も15名前後であった。参加した教師が、事例報告会の直後に、教材について自立活動係に相談してくるケー

スも多く、自立活動系の役割を知らせることができるよい機会となった。実施内容とその結果については、表2のとおりである。

表2 事例報告会の実施内容と結果

	事例報告の内容 ＜支援＞・児童生徒の変容	参加者からの相談内容	相談への対応
第1回 6/8	＜一回のスイッチ操作によって電流が流れる時間を、タイマーで様々な設定できる教材（Wing-LT）を用いた支援＞ ・電動シャワーにWing-LTを併用することで、手の動きが安定しない児童生徒が、一回のスイッチ操作で一定時間、教師や自分自身に水をかけ、活動することができた。	おもちゃを自分で操作して遊べるようにしたい、スイッチを製作したい等の相談が、夏季休業までに合計で25件寄せられた。	おもちゃの改造については随時対応（改造の手助けやアドバイスなど）。 夏季休業期間中に棒状スイッチ、箱型スイッチの製作会を開催した。
第2回 7/15	＜おもちゃのビールサーバーに外部スイッチを取り付けられるよう改造・2例＞ ・お茶を注いでもらっていた子どもが、教師にお茶を注いでくれた。 ・コップの水を空になるまで注いでしまう子が、調理実習で水の分量を調節して注げた。	ビールサーバーを改造して使用したいとの相談が2件あった。その後、教師からの紹介により、保護者からも同様の教材を児童生徒に使用させてみたいとの相談が3件寄せられた。	夏季休業期間中に全保護者を交えた製作会を開催した。
第3回 8/27	＜デジタルカメラに外部スイッチを接続して撮影・再生を支援＞ ・絵を描くのが難しい児童生徒が、写生大会で、好きな風景を撮影することができた。 ・全校集会の内容を理解するのが難しい児童生徒が、集会の様子を撮影することで参加できた。	担当の児童がデジカメ撮影をできるようにしてみたいという相談が1件寄せられた。	デジカメ及び外部スイッチを接続するために必要な教材を所有している教師を紹介し、貸し借りの橋渡しを行った。

C2) 教材の準備の手助け

貸し借りの支援

＜教材データベースの作成と活用＞

教師間で、教材を用いた支援についての情報交換がスムーズに行えるよう、データベースを作成。今年度はIT教材について、校内の所有者のデータベースを作成し、校内のネットワークによりパソコン上で参照できるようにした。

また、教材の所有者が、アイキャン教材プロジェクト（後述、C3参照）のwebページに実践を載せている場合は、そのwebページのURLや対象児童生徒の教育課程情報もデータベースに記した。これにより、閲覧する教師は、必要としている教材の所有者を確認できるだけでなく、その教材を用いた実践事例も参考にできるようになった。

教材の製作支援

市販されていない教材について相談を受けた際、相談をしてきた教師を集めて教材製作会を開催した。開催した製作会は全部で6回、延べ43名の教師が参加し、児童生徒の個々の実態に合ったスイッチ類や、音声録音再生教材（VOCA）などを製作した。

表3に教材製作会で製作した教材とその数について示す。

表3 教材製作会で製作した教材集計表

製作した教材名	数
アイキャンVOCA（音声録音再生教材）	13
アイキャンMIDI（音楽自動演奏教材）	3
Wing-QV（デジタルカメラ撮影再生支援教材）	1
赤外線リモコンの改造	6
おもちゃのビールサーバーの改造	2
棒型スイッチ	10
箱型スイッチ	4
MDケーススイッチ	4

C3) 校外協力者との連携

支援について情報の共有

校内の教師から、教材を用いた支援についての相談を受けた際、自立活動係が、校内の実践事例だけでなく他校の実践事例を参考にするために活用したのが、総合教育センターによる「アイキャン教材プロジェクト」である。このプロジェクトのwebページには、教材・教具を用いた支援の実践事例が数多く載せられている。これらを紹介することで、相談への対応を行うことができた。

実際に実践事例を紹介した相談は3件であるが、自立活動係がこのプロジェクトを通じて教材を用いた支援についての知識を得たことで、相談に対する助言の幅を広げることができた。

教材製作の連携

他校との連携によって教材製作の機会を増やした。どこでどのような教材製作会が開催されるかといった情報を、アイキャン教材プロジェクトのネットワーク（主にメーリングリスト）を活用することで得ることができた。こうして教材製作の機会が増えることにより、児童生徒への支援に必要な教材のニーズに早めに応えることができた。

自立活動係が他校での製作会を紹介し、製作を行った教師は延べ11名であった。

表4に他校で製作した教材・教具とその数を示す。

表4 他校での教材製作会で製作した教材集計表

製作した教材名	数
Wing-USB（パソコンのキー操作支援教材）	3
アイキャンVOCA（音声録音再生教材）	3
アイキャンMIDI（音楽自動演奏教材）	2
アイキャンTA（タイムエイド）	2
ACリレー（AC電源を外部スイッチでON/OFFする教材）	1

C4) 実践報告の収集・検証

実践報告の収集 (資料編・資料 実践報告参照)

コーディネートを行った支援について、実践報告を4事例収集した。

主体的な活動の検証

児童生徒が教材を用いて、「他校に出かけた際、自己紹介を行った(実践報告1)」、「自分の好きな音を聴く(実践報告2)」、「朝の会の日直を通じて、友達とコミュニケーションを図る(実践報告3)」などの主体的な活動が見られた。

これらの資料からわかるように、これまで「児童生徒自身が行うことは困難」とされて、教師や保護者が代わりに行っていた活動を、児童生徒自身が行い、集団に参加できるようになった。

また、「ボーリングゲームを行うことで、朝から深く寝てしまったりすることが少なくなっている(実践報告4)」のような事例からは、自分の行動が“ボールが転がる”という結果につながる経験によって、活動が積極的になってきていることがわかる。

C5) 自立活動係に対する評価

アンケートの実施

自立活動係に対する評価アンケートを実施し、次のような結果を得た。

アンケート実施結果

2学期終了時点・回答数27(全体の35%)

教材・教具について自立活動係に相談したことがありますか？

ある	9
ない	18

(あると答えた人に)どのような相談でしたか？

教材製作会について	1
おもちゃの改造について	1
スイッチの製作について	2
座位保持椅子の調整の仕方について	5

今後、どのようになったら、教材・教具に関する相談がよりしやすくなると思いますか？

たくさん勉強できる機会が欲しい。(4件)
研修講座をどんどん増やしていくとよい。疑問をもつ目が養われるし、どんな人に相談すればよいかかわかるようになると思う。
日時を決めて、展示会や相談会を実施すると、そのときに相談もしやすい。
(同様に、教材・教具を紹介する機会を多く設けて欲しい。5件)
教材を使用している児童生徒の様子を、ビデオ等で見せてもらえるとよい。
教材・教具の写真や使い方等を簡単に冊子にして一箇所においておけば、必要なとき見ることができて便利。
本校で使われている教材について、整理し、職員に情報提供する。(2件)
教材について話がしやすい人間関係づくり、時間づくりが必要でしょうか。
IT教材は個人で作って使うイメージがあるが、音声再生教材(VOCA)、音楽自動演奏教材(アイキャンMIDI)などは自由に使えるものが学部にはいくつかあると活用しやすい。
自立活動係が教材・教具の支援まで行うのは大変なのでは。

アンケートで寄せられた ~ までの要望については、表5のように対応を検討した。

表5 要望への対応

番号	要望への対応
~	今年度、夏季休業中に自立活動係が研修会（教材・教具に関するもの以外も含めて）を例年より多く開いたことから、「このような研修会をもっと企画して欲しい」という意見が出され、アンケートにもそれが反映されたものと考えられる。来年度以降は、計画的に研修会を企画する。
~	今後、事例報告会を定期的に回数を増やして開いていく。
~	アンケート後に教材データベースを公開した。また、来年度、備品管理の係と連携を図り、校内の全備品確認作業の際、教材・教具の写真リストを作成することを、引継ぎ事項として係内で確認した。
	自立活動係からの働きかけだけでは対応の難しい面もあるが、教材・教具について話す機会作りにつながるので、事例報告会の回数を増やしていく。
	学校所有の教材を製作して自立活動係が管理していたが、展示して随時貸し出すようにし、より手軽に活用できるようにする。
	来年度、教材・教具について、専門の係の設置を校長に要望する。

相談件数の集計

自立活動係が受けた相談の内容を大きく3種類に分け、月別に相談件数をまとめたのが図2のグラフである。

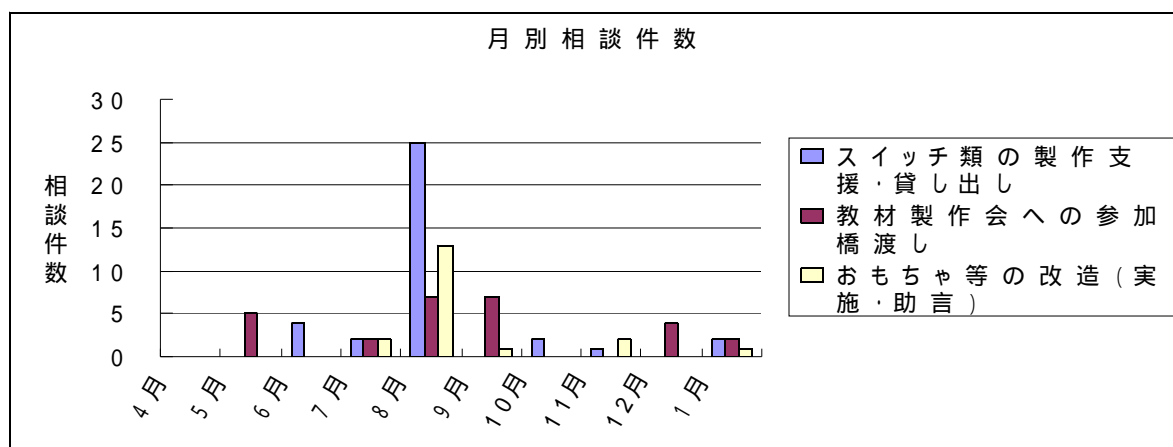


図2 月別相談件数のグラフ

夏季休業中に相談件数が急に増えているのは、次の ~ が考えられる。

スイッチなどの製作会を校内で開催し、それを教師に呼びかけたこと

各教師が1学期の授業を通じて把握した児童生徒の実態をもとに、2学期以降の指導や支援の準備を行う時期であったこと

授業がなく勤務時間内で教材の準備を行いやすいこと

教材を用いた支援を以前から積極的に行っている教師は、自分で教材を所有していたり、製作していたりするため、製作会への参加以外での相談はなかった。グラフはほぼ、今年度初めて教材を用いた支援を行った教師からの相談数である。これは、自立活動係が相談窓口として

機能したことにより、教材を用いた支援に関心をもつ教師が新たに増えたことを示している。

アンケート結果と相談件数とを比較すると、アンケート結果よりもはるかに多くの相談が、年間を通じて教師から寄せられている。これは、「自立活動係に対して相談をした」という意識がなかったことによるもので、相談でなく「ちょっとしたアドバイス」、「製作会に参加したいときの窓口」と捉えられていたと考えられる。これは気軽に自立活動係に助言を求めて解決できたということである。

2 保護者に対する働きかけ

C6) 支援についての情報提供

教材の展示

児童生徒の送迎などで来校する保護者向けに、支援に用いられている教材の展示を行った。また、文化祭での教材の展示により、多くの保護者に教材を実際に触れてもらって、どのような教材が校内で用いられているか知ってもらうことができた。

教材を用いた支援について説明

校内で教材を用いた支援が多く行われるようになり、本校が会場となった製作会の様子がテレビで中継されたことなどから、授業参観や保護者面談時に、教材を用いた支援について説明がしやすくなった。

教材の展示や教材を用いた支援の説明によって、「うちの子にもこの教材が欲しい」という保護者の意見が3件寄せられた。

C7) 教材の準備の手助け

教材の貸し出し

保護者から相談を受け、教材の貸し出しは、3件行うことができた。

貸し出した教材と、家庭での使用状況は表6のとおりである。

表6 貸し出し教材の家庭での使用状況

貸し出した教材	使用状況
改造ビールサーバーおよびスイッチ	父親の誕生日に、子どもがビールを注いであげることができた。
改造ビールサーバーおよびスイッチ	普段はジュースを注いでもらっている生徒が、家庭で、母親にジュースを注いであげることができた。
改造リモコンおよびスイッチ	部屋で一人で過ごしているとき、母親にCDをかけておいてもらい、自分でスイッチを操作して好きな曲を繰り返し聴くことができた

教材の製作支援

保護者から、学校で用いている教材が家庭でも欲しいという意見が寄せられるようになったため、全校の保護者に通知して夏季休業中の製作会への参加を呼びかけた。その結果、延べ12名の保護者が参加した。

表7に保護者が行った教材の製作内容を示す。

表7 保護者が行った教材の製作内容

製作または改造した教材	件数
テレビやビデオに児童生徒が操作しやすい外部スイッチを取りつける改造	3
おもちゃを児童生徒が操作しやすくするための改造	3
棒状スイッチ及び箱型スイッチの製作	6

保護者が参加し、児童生徒が家庭で用いる教材の製作会は、本校では初の試みであり、家庭との連携の成果となった。

製作会后、製作を行った保護者のうち2名から担任を通じて、家庭でうれしそうにテレビのチャンネルを切り替えている児童生徒の様子を聞くことができた。この保護者の製作会をきっかけに、児童生徒の様子や教材について情報交換をする機会が増えた。

研究のまとめ

1 研究の成果

本研究では、教材を用いた支援のコーディネートを始め、係への相談が、年間を通じて、延べ82件寄せられた。これは、自立活動係の役割が広く認められてきたことを反映しているとともに、教材を用いた支援のニーズが多くあることを示している。

(1) 教師に対して

事例報告会等を通して実践事例を教師に紹介したことで、教材を用いた支援が、児童生徒の主体性を引き出す有効な手だてのひとつであることを知らせることができ、教材を用いた支援が校内に増えた。

また、実践事例とともに、使用している教材などを紹介することで、相談者個人の知識をもとに支援の方法を自分で工夫するよりも、相談者が多くの情報の中から必要な解決策を得られるよう手助けすることができた。

相談者が教材を必要とした際には、貸し借りの橋渡しや製作支援を行うことにより、個人個人が教材を準備するよりも、支援に必要な準備を容易に行えるようになった。

本研究では、校内だけではなく、校外の協力者とも連携を図れたことで、コーディネートの幅が広がり、多くの実践事例を参考にしたり、製作会の相互参加によって教材製作の機会を多く提供したりできた。今後とも継続していきたい。

(2) 保護者に対して

保護者へのコーディネートでは、校内での教材を用いた支援について情報提供することで、保護者が参加する教材製作会の開催へとつながった。家庭でも教材を用いた支援が行いやすくなるよう、コーディネートできたことは大きな成果である。

2 今後の課題

(1) 保護者に対して

本研究により本校では初めて、教材製作会に保護者の参加があったが、そこで制作した教材について、家庭でどのような支援が行われたか、事後の経過について係が十分把握できなかった。「家庭で行われている教材を用いた支援についての状況調査の実施」、「校内での支援について、家庭への情報提供をより充実させる」など、家庭に対するコーディネートを進め、今年度以上に家庭での教材を用いた支援の手助けを行っていきたい。

(2) 教師と保護者に対して

より多くの教師や保護者からの相談に応えられるよう、「教材を用いた実践事例を紹介する機会を、定期的に設ける。」、「校内で用いられているIT教材以外の教材・教具の情報をデータベース化し、提供する。」などの活動を行っていきたい。

教師や保護者からの相談に応じる中で、自立活動係だけでの対応には、知識面・技術面で限界があると感じた。相談内容によっては、その内容について高い知識・技術をもっている他の教師に協力を求め、相談者との橋渡しをする必要がある。

< 参考資料 >

- ・ 上岡 一世 著 『自立と社会参加を目指す自閉症教育 2・自閉症の児童生徒が地域で自立する生活づくり』 明治図書（2004年4月）
- ・ 支援技術利用促進検討委員会 編 『Introduction to e-AT - 電子情報支援技術を学ぶ - 』 財団法人・ニューメディア開発協会（平成14年3月）
- ・ 小貫孝泰 著 『郵便局のみなさん「こんにちは」』 『発達の遅れと教育』564号所収（2004年8月）
- ・ 松本 廣 著 『実践報告 アイキャン教材プロジェクトの実践』 『肢体不自由教育』第168号所収（平成17年1月）
- ・ 『平成14年度重点事業障害のある児童生徒の思いがかなう教材の開発・普及 - アイキャン（I can.）教材プロジェクト - 成果報告書』群馬県総合教育センター（2003）http://www.center.gsn.ed.jp/tokusyu/h14_lcan/index.htm
- ・ 『平成15年度重点事業障害のある児童生徒の思いがかなう教材の開発・普及 - アイキャン（I can.）教材プロジェクト - 事業報告』群馬県総合教育センター（2004）http://www.center.gsn.ed.jp/tokusyu/h15_lcan/index.htm

好きな音が、聞こえたよ

快発声・快表情を促す指導

生徒の実態（訪問教育）

視覚は、明暗がわかる程度ではないかと言われている。聴覚からの刺激受容が主なものとされているように音に敏感であり、母親の声・生活音・自分の好きな音楽など、幅広く音を聞き分けることができるように思われる。

ADL は全介助である。普段の生活は空調管理の行き届いた自宅の一室で、布団に横になったり座位保持椅子にすわったりして過ごしている。

B はとても表情豊かな生徒である。意思の表出手段としては、「おなかが苦しい」「暑い」などの不快な時に「わ～」という大きな声を出して母親を呼ぶ、「気の進まない学習だと口を尖らせ怒ったような表情をする」、「自分の好きな曲（歌）が流れるとその曲（歌）を口ずさむように「は～」と声を出す」、「面白い事があると笑い声をあげる」、「気持ちよい時には明らかに「快だな」と思われる声をあげる」などである。

期待した活動（指導のねらい）

B はいろいろな音を聞くことが大好きである。耳からの学習には特に集中して取り組む。そこで、B が好きな音を自分の好きなタイミングで聴けるようにならないかと考えた。本事例でアイキャン V O C A を用いる利点としては、6チャンネルまでの録音と再生が可能であることが挙げられる。この機能を利用し、次のような音声を録音した。

「虫のこえ」の擬音部分を楽器の音で録音した。

「緊急自動車」の音を録音した。

ちょうど学校で大規模な避難訓練が行なわれた時に、その様子を話し、緊急自動車の音を聞いた。非常に喜び、何回もアンコールするほどだった。

「自分の声」を録音した。自分の声が録音されたものを聞いたことがないであろうと思われるため、指導者がBの反応を見たかったこともあげられる。また、自分の声を意識してもらいたいという気持もあった。

使用した教材・教具

アイキャン V O C A

シャーレスイッチ



生徒の活動

B の目の前でそれぞれの「虫のこえ」としての楽器（または「緊急自動車」の音）を鳴らし、指導者が録音したものを何回か聞く。この時点ですでに喜んでいる。「今度は自分で音を鳴らして聞いてみようね」と話し、シャーレスイッチにつなげた V O C A を B の手と胸の間にはさみ、自力でスイッチを押せる状態にし、最初は指導者と一緒にスイッチを入れ、要領をつかむ。くり返し学習していくうちに、自力でスイッチが入り、録音された音が聞こえる。満面の笑みをうかべてうれしそうな声をあげ、再度挑戦しようとしていた。「自分の声」を聞いた時には不思議そうな顔をしていたが、慣れると穏やかな表情をするようになった。

「朝の会で日直の仕事がんばっているよ」

～朝の会を通じたコミュニケーションの指導～

生徒の実態

Cは、教師からの問いかけに対し、肯定・否定の意思表示は身振りで行うものの、右半身に麻痺があり、発語がないため、他の友達とのコミュニケーションを図る手段がなかった。入学当初は、周りの友達がどのようなことをしているのか、あまり興味のない様子で、まわりで笑ったり泣いたりしている友達の様子を見ていることが少なかった。しかし、Cは、授業の開始時や終了時に「号令をかけてくれる人」という教師の問いかけに対して左手をあげて応え、左手を動かし号令をかけた。その後、教師がCの動かす左手の動きに合わせて号令をかけるようにすると、Cはさらに積極的に号令をかけるようになった。

期待した活動

Cが他の友達とコミュニケーションを図る場として、朝の会の時間を選んだ。朝の会の日直は友達の名前を呼んだり、次に何を行うのか話しかけたりする。朝の会の日直はCと周りの友達とのコミュニケーションの第一歩であると考えた。そこでVOCAを用いることで、Cに次の活動を期待した。

朝の会で自分自身で司会ができるようになる。

朝の会で友達一人ひとりの名前を呼び、周りの友達の様子を見て、自分が名前を呼べば友達が返事を返してくれるという気持ちを味わう。

使用した教材・教具

アイキャンVOCA

フロッピーケースをもとに作った叩くスイッチ

生徒の活動

一学期の朝の会では、号令をかける（左腕を動かす）時は笑顔を見せていたが、それ以外の時はやや退屈な時間を過ごしていたように見えた。

二学期に入り、CがVOCAを朝の会で使いたいという意思が確認できた。そこで、本人が号令をかけているという気持ちをもてるようにするために、個別学習の時間に、日直の仕事をする時に話す言葉を相談した。そして6つのチャンネルに、「これから朝の会を始めます。注目。礼。」、「お名前を呼びます。」など、6つの言葉を決めて録音した。録音したものをもう一度Cの前で聞かせて確認していくと、にこにこしながら音声聞いていた。

朝の会で実際に日直の仕事をVOCAを用いて行った。Cはにこにこしながらもつとスイッチを叩きたいという様子を見せていた。その後、朝の会で日直の仕事をした感想を聞いた。するとCは、スイッチを使って良かったと答え、さらに友達の名前を呼んでみたいという様子を見せた。

2学期の終わりに、中学部の行事でCがあいさつをする機会があった。普段、朝の会で接している友達以外の友達も多くいる中で、あいさつをするというものであったが、緊張した様子を見せつつも、みんなの前であいさつをすることができた。そのときCは無事にあいさつができて満足した表情を浮かべていた。

「今日の給食のメニューを発表します」

- 活発な取り組みを促すために -

生徒の状態(実態)

体幹機能障害及び知的障害がある。ADLは全介助である。進行性の病気のため、四肢、体幹の拘縮は進み、体調によって覚醒レベルが低かったり、また不随意的な緊張も引き起こされたりしている。一日に何度か痙攣発作がある。

食べることが大好きで、午前中うとうとした状態であっても、給食を準備しだすと、はっきりした表情になり、教師の動きを目で追ったり、口を動かしたりと活発になる。実物でなくても食べ物の話題や関連した絵本を見たりするだけで、興味をそそられ、真剣な表情で口を動かしたりすることが見られた。また本生徒は、勝ち負けを競うような状況で真剣になる様子が見られていた。自分からは興味のあるものを目で追ったりすることはあるが、本人の意思を確かめたくて、教師が二者択一の選択肢を示しても、視線を動かして選ぶことは難しい。

期待した活動(指導のねらい)

本人ができるだけ自ら体を動かそうとしたり、意思を伝えようとしてできるように興味、関心をもって取り組める活動を設定したいと考えた。そこで、具体的には、給食を食べる際の、「いただきます」や「ごちそうさま」を本生徒がかけられるようにしたいと考えた。

使用した教材・教具

アイキャンV O C A ・棒スイッチ

ひもスイッチや棒スイッチによって、斜面が傾き、ボールを転がせる道具

生徒の活動(変容)

棒スイッチをあごにあて、主に口の動きによって「いただきます」や「ごちそうさま」などの号令をかけた。また、「今日の給食は～と・・・です。」とV O C Aに録音しておき、朝の会などで本人に給食メニューを発表できるようにした。自分の動きによって、自分が興味ある話題(給食メニューの発表)が展開され、本人にとって自分の活動とその結果の楽しみを結びつけるよい機会となった。スイッチと音声の因果関係を理解して活動しているとはいえないが、教師を介して本生徒が口を動かすことで、教師と興味を共有することができているように感じている。

ひもスイッチを引いたり、棒スイッチを口や手の動きで動かしたりして、斜面にボールを転がし、ボーリングゲームを行う活動を行っていく中で、朝からウトウトしていたり、深く寝入ったりすることが少なくなっていることを強く感じている。また、本生徒が教師の口元に注目したり、教師の動きを目で追ったりすることがよく見かけられるように思う。



「今日の給食は、ご飯、焼き魚、
鮭、ひじきの煮物、牛乳です」